

「表現（創作）」と「鑑賞」の一体化をめざした教材開発の実践的研究

A Practical Study on the Development of Teaching Materials
for the Integration between Creative Music-Making and Appraising

森本 菜奈視* 河添 達也**
Nanami MORIMOTO Tatsuya KAWASOI

要 旨

平成20年（2008年）の学習指導要領の改訂で、中学校音楽科では、〔共通事項〕が新設され、「表現」と「鑑賞」の相互関連を図った学習内容の実践が求められている。また、「表現」の中でもとくに「創作」については、これまでより指導内容が焦点化し、明確化された。本研究では、生徒や教師の「創作」に対する意識を明らかにし、「鑑賞」の学習経験を生かした「創作」の授業実践を行うことで、「表現（創作）」と「鑑賞」の一体化をめざす教材開発と授業方法の一案を提示した。

〔キーワード〕 創作，鑑賞，編曲，比較聴取

I はじめに

本稿は、中学校音楽科における「創作」の学習に関わり、「A表現」（以下、「表現」）と「B鑑賞」（以下、「鑑賞」）の2つの領域の一体化をめざした教材開発と授業実践を試み、その学習や指導法の在り方と可能性を考察したものである。

平成20年（2008年）に改訂された第8次中学校音楽科学習指導要領では、「表現」及び「鑑賞」に関する能力を育成する上で共通に必要な〔共通事項〕が新たに設けられた。これにより、音楽科については、「表現」と「鑑賞」の相互関連を図った学習内容の実践が求められている。また、「表現」の中でもとくに「創作」については、これまでより指導内容が焦点化し、明確化された。しかし、「創作」活動に対して、苦手意識や消極的な意識を抱いている生徒や教師が多く存在しており、授業があまり実践されていないことが課題となっている。

そこで、筆者は、生徒や教師の「創作」への意欲を喚起するために、「鑑賞」の学習経験を生かした「創作」活動を提案し、「表現（創作）」と「鑑賞」の一体化をめざす授業方法の模索および教材開発に取り組むこととした。

* 島根大学大学院教育学研究科

** 島根大学教育学部芸術表現教育講座

次章では、生徒や教師の「創作」活動に対する意識を明らかにし、「表現（創作）」と「鑑賞」の相互関連を図った授業の実践例について把握していく。Ⅲ章以降では、森本が、島根大学教育学部附属中学校の第2学年の生徒を対象に行った授業実践記録に基づき、「鑑賞」の学習経験を生かした「創作」の授業の可能性と課題について検討する。

Ⅱ 「創作」をとりまく現状と先行事例

1. 生徒や教師の「創作」に対する意識

平成20年度に実施された国立教育政策研究所の「音楽等質問紙調査」における「創作」活動に関する実態調査（中学校第1～3学年を対象）をまとめると、以下のとおりになる。

図1 普段の生活のなかで、
旋律などの音楽をつくることがあるか

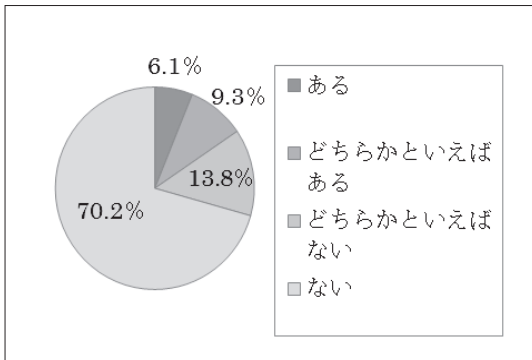


図2 旋律をつかって表現すること

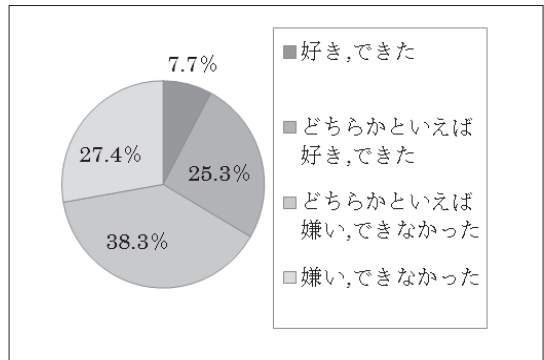


図3 様々な音を用いて
自由に表現や創作をすること

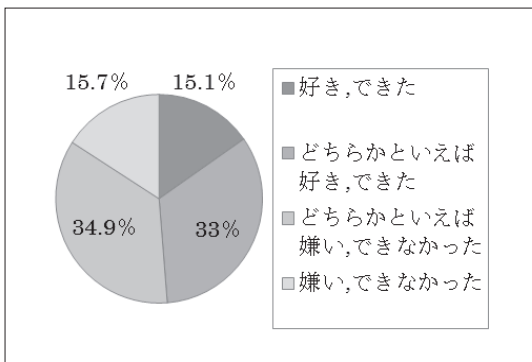
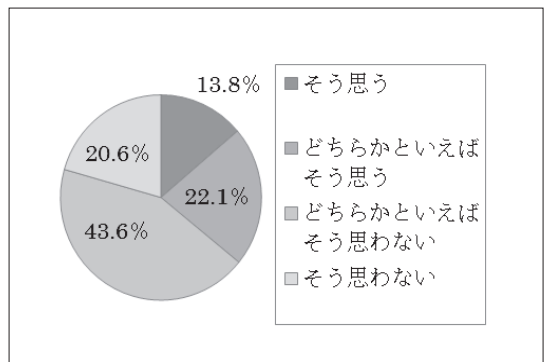


図4 創作の活動が生徒にとってしやすいか



「音楽等質問紙調査」国立教育政策研究所（2008）

普段の生活の中で「創作」をする生徒はほとんどおらず、約8割の生徒が「創作」をすることはないと答えている。また、嫌いであったり、困難を感じていたりする生徒も半数以上おり、「創作」に対しての苦手意識や消極的な意識が高いことが分かる。教師側も、生徒には「創作」の活動は難しいと感じている傾向があり、授業においても「創作」を実施する機会が少ないことが考えられる。

これらの調査結果から、生徒や教師は「創作」授業に対して消極的な意識を抱いている状態であると言える。その理由を生徒と教師ごとに分けて見ていきたい。まず、生徒が「創作」に対して苦手意識を抱いている理由を、川村（2012）は、次のように報告している。

「苦手としている主な理由として、『音符を操作することが難しそう』『何を書けばいいのかイメージがわからない』『音楽をつくることに自信がない』『音楽をつくったことがない』『音を組み合わせることが難しい』などの理由が挙げられた。」

また、百武（2009）は、教師が「創作」の実践を困難としている理由を、次のように述べている。

「第一点目は音楽に関する知識、楽譜を読む力、演奏技術など、多くの音楽能力が必要であること。第二点目は、創作活動によって、生徒に何を学ばせるのか曖昧だということ。第三点目に1年生は年間45時間2、3年生にいたっては年間35時間という少ない授業時数で『創作』を行うには時間的に余裕がないことである。」

さらに、前掲の川村（2012）は、生徒と教師の両者の視点から、次のように述べている。

「教師も生徒も『音楽での創作は作曲すること』と思いがちで、創作の活動を行うには、専門的な音楽理論や作曲のための知識が必要と考えられているのが現状である。」

以上のことを踏まえると、生徒も教師も「創作」活動に取り組むことに困難を感じていることが、「創作」分野の課題であると考えられる。

2. 先行事例の分析

「創作」と「鑑賞」の相互関連を図った題材の授業実践事例は、指導要領の改訂を機に数を増やしつつある。それらは、大きく以下の3つに分類することができる。

- (1) 「創作」の活動を経て「鑑賞」の活動を行うもの
- (2) 「鑑賞」の活動を経て「創作」の活動を行うもの
- (3) 「創作」の活動と「鑑賞」の活動を交互に繰り返し行うもの

このような先行事例のうち、筆者は「比較聴取」を取り入れた授業実践に注目してみた。衛藤・小島（2006）は、「比較聴取」を次のように定義している。

「比較聴取とは、ある点で共通点を持ちながらもある点で異なる面を見せる複数の音楽を提示し、対比的にその違いを目立たせて知覚・感受させる方法ということができる。」

前掲の衛藤・小島（2006）による実践では、「雨」をモチーフにした複数の楽曲を「比較聴取」させ、自分たちが考えた「雨の様子」を音で表現するという「創作」の授業を展開していた。また、日吉・山崎（2012）による実践では、シューベルト作曲《ピアノ5重奏曲『ます』第4楽章》の第1変奏と第3変奏を「比較聴取」させ、「鑑賞」能力の向上をねらいとする授業を行っていた。

さらに、「比較聴取」の効果について、前掲の衛藤・小島（2006）は、次のように述べている。

「比較聴取は子どもに聴く観点を与え、そこを切り口に知覚と感受の相互作用を促進し、相互作用での成果は表現活動に応用されたことがわかった。それは、比較聴取はその条件統制の構造ゆえに、構成要素の働き（知覚）と表現効果（感受）の関係の実験の場としての機能をもつからであると考えられる。」

このように、「比較聴取」を取り入れることは、「表現」活動を行うにあたって効果的であることが分かる。複数の楽曲を「比較聴取」することで、それらの対比的な部分と類似的な要素とに気付かせることができるからである。そして、それらの気付きが、「創作」活動を行う際の手がかりとなるのではないかと考えられる。

しかし、「創作」と「鑑賞」を関連させた授業の先行事例では、「鑑賞」の学習を活かしてオリジナルの楽曲創作を行うものがほとんどであり、創作技術の問題から、「鑑賞」における学びが「創作」活動に有効に生かされているとは、必ずしも言えない現状もある。

そこで森本は、以下の2つの活動を基軸とした授業開発を試みた。

・「編曲」を中心とした「創作」活動

すでにできあがっているもののテンポや音色、強弱などの音楽を形づくっている諸要素を変化させたり、合いの手やハモリなどを加えたりする「編曲」の作業も重要な「創作」活動である。一から創作するよりも、「編曲」の方が生徒にとって取り組みやすい。

・同一楽曲における複数の異なる編曲版を用いた「比較聴取」

多様な編曲スタイルによる同一楽曲を「比較聴取」の教材とすることで、相違点や共通点などの聴取のポイントを明示し、鑑賞力の向上を促す。そのような「鑑賞」の学習経験を生かして、今度は実際に「創作」活動を行う。「比較聴取」の経験から得た聴取のポイントを、「創作」活動の際には具体的な創作上の留意点として提示し、生徒の創作意欲の喚起をめざす。このような学習内容によって、本研究の目的である、「表現（創作）」と「鑑賞」の一体化をめざした授業開発を行う。

Ⅲ 授業実践

1. 生徒の実態把握

(1) 事前アンケート

授業実践を行う島根大学教育学部附属中学校2年生（4クラス計128名）を対象に、「創作」活動に対する意識を明らかにするための事前アンケートを実施した。

表1 今までにメロディーや曲をつくったことはありますか。 人 (%)

	①ある	②少しある	③ほとんどない	④まったくない
2年1組	3 / 32 (9.4)	7 / 32 (21.9)	5 / 32 (15.6)	16 / 32 (50.0)
2年2組	2 / 32 (6.3)	7 / 32 (21.9)	5 / 32 (15.6)	18 / 32 (56.2)
2年3組	5 / 33 (15.2)	5 / 33 (15.2)	5 / 33 (15.2)	18 / 33 (54.5)
2年4組	6 / 31 (19.4)	3 / 31 (9.7)	4 / 31 (12.9)	18 / 31 (58.1)

表2 メロディーや曲をつくることに興味はありますか。 人 (%)

	①ある	②どちらかといえばある	③どちらかといえばない	④ない
2年1組	6 / 32 (18.8)	12 / 32 (37.5)	4 / 32 (12.5)	10 / 32 (31.3)
2年2組	6 / 32 (18.8)	13 / 32 (40.6)	5 / 32 (15.6)	8 / 32 (25.0)
2年3組	4 / 33 (12.1)	10 / 33 (30.3)	12 / 33 (36.4)	7 / 33 (21.2)
2年4組	7 / 30 (23.3)	5 / 30 (16.7)	6 / 30 (20.0)	12 / 30 (40.0)

図5 「興味がある」「どちらかといえば興味がある」と答えた理由（複数回答可）

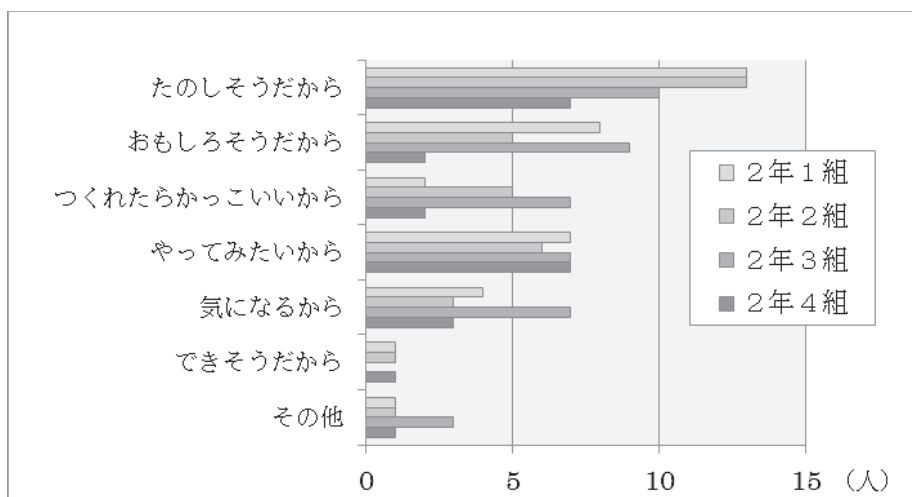
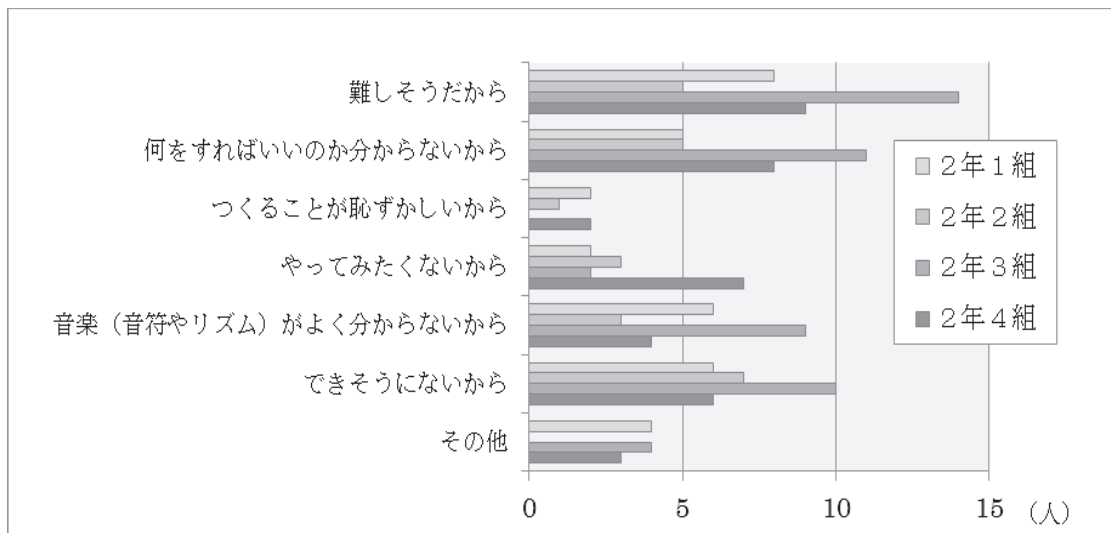


図6 「興味がない」「どちらかといえば興味がない」と答えた理由（複数回答可）



どのクラスも半数以上の生徒がメロディーや曲の創作経験がまったくないことから、初めてでも生徒が取り組みやすいような「創作」活動の内容を考える必要がある。また、作品の完成にまで導いていけるような手立てや教具も工夫すべきポイントとなるだろう。

メロディーや曲をつくることに対して、興味を示した生徒は1・2組では約6割だったが、3・4組では約4割にとどまった。興味がある理由としては、「楽しそうだから」「おもしろそうだから」「やってみたいから」など、一方、興味がない理由では、「難しそうだから」「何をすればいいのかわからないから」「できそうにないから」などが多く挙がっていることが分かる。「創作」の方法を明確に示し、見通しをもって活動に取り組めるよう教師が導く必要があると考える。

表3 音楽の活動で好きなものに順位をつけてください。(人)

	1位	2位	3位	4位
歌を歌うこと（歌唱）	33	38	34	21
楽器を演奏すること（器楽）	30	35	46	16
メロディーや曲をつくること（創作）	2	14	30	78
曲を聴くこと（鑑賞）	65	39	14	9

音楽科の4つの活動内容である「歌唱」「器楽」「創作」「鑑賞」を好きなものに順位づけさせたところ、圧倒的に「創作」が最下位となった。「創作」の経験がないことや、興味が低いことなどから、「難しそう」「できそうにない」のようなマイナスのイメージへとつながってしまっているのではないかと考えられる。一方、1位の数が一番多いのは「鑑賞」であった。このことから、プラスのイメージがある「鑑賞」の経験を踏まえて、「創作」の活動を展開することは、生徒の創作意欲を向上させることにつながるのではないかと考えた。

(2) 島根大学教育学部附属中学校の「創作」の実際や実績

本校での「創作」活動の授業実践は、「歌唱」「器楽」「鑑賞」の活動に比べると極めて少ない。今年度は、1年生の年間指導計画の中に「情景を音楽で表そう」という題材名の「創作」活動が組み込まれているが、昨年度はこの活動は行われていなかった。そのため、現在の2年生は同中学校においても「創作」の活動を行ったことがなく、「創作」と言われても何をどうしたらよいか分からない生徒が多いと予想される。

このように、「創作」活動は自分たちにとってハードルの高い活動であると感じており、消極的な意識を抱いている生徒が多いことが分かった。また、創作経験がないという実態も考慮すると、やはり「比較聴取」の経験を生かした「編曲」での「創作」活動を行う方が、生徒にとって適当であると考えた。

2. 授業実践

- 題材名 「物語に合ったオリジナルBGMをつくろう！」
- 対象 附属中学校2年生（4クラス）
- 実施日
- | | |
|--------|---------------------------|
| 〔2年1組〕 | 12月10日（火）6校時、12月13日（金）5校時 |
| | 12月18日（水）3校時、12月24日（火）3校時 |
| 〔2年2組〕 | 12月9日（月）5校時、12月11日（水）1校時 |
| | 12月18日（水）4校時、12月20日（金）4校時 |
| 〔2年3組〕 | 12月10日（火）5校時、12月13日（金）1校時 |
| | 12月16日（月）2校時、12月18日（水）2校時 |
| 〔2年4組〕 | 12月11日（水）2校時、12月13日（金）4校時 |
| | 12月17日（火）6校時、12月19日（木）2校時 |

○題材の目標

- ・同一楽曲における異なる編曲を味わい、その違いを感じ取ることで自分たちの創作活動に活かすことができる。
- ・与えられた静止画から感じ取れるイメージや印象をもとに物語を膨らませ、一つの旋律をアレンジしながら物語に合うBGMを工夫して表現することができる。

○附属中学校指導教員 小村聡教諭

(1) 題材について

「編曲」ではあっても、「創作」活動において大切なのは、その源となるイメージをもつことである。今回の授業では、創作していくうえでのイメージが湧きやすいように、「トムとジェリー」の静止画をグループごとに3枚与え、一つの物語を考えさせた。そして、ある一つの旋律をその物語に合うように「編曲（アレンジ）」し、オリジナルのBGMをつくるという「創作」の授業を発案した。

本授業におけるBGMづくりの手順の概要は以下のようになる。

森本が考案した8小節のオリジナル旋律にまず4種類の装飾を施し、変奏A～Dを生徒に提示する（Aはシンコーペーションを特徴とする装飾、Bは三連符を多用かつ短調へ調性を転換、Cは3拍子へ拍子を転換、Dは符点を多用かつ短調へ調性を転換）。この4種の旋律から各グループで一つを選ぶ。その後、さらにその旋律に（比較聴取によって知覚した）音楽の諸要素を追加したり変更したりして、自分たちの創作した物語にふさわしい「編曲」を行う。

1時間目では、4種類に装飾された旋律の「比較聴取」とそれを踏まえての旋律の選択、2・3時間目では、「編曲」実践による「創作」活動、そして4時間目では、創作したBGMをグループごとに演奏し、もとなる旋律がどう変わったのか「比較聴取」する活動を行った。このように、「鑑賞」の学習経験を活かした「創作」活動を行い、再び「鑑賞」の活動を行うことで、「創作」と「鑑賞」の一体的な学習を深めることができるのではないかと考えた。

(2) 授業計画と評価

〔評価の観点と評価規準〕

	ア 音楽への 関心・意欲・態度	イ 音楽表現の 創意工夫	ウ 音楽表現の 技能	エ 鑑賞の 能力
歌唱				
器楽				
創作	○	○		
鑑賞				○

〔題材に即した具体的評価規準〕

	ア 音楽への 関心・意欲・態度	イ 音楽表現の 創意工夫	エ 鑑賞の能力
題材の 評価規準	音楽に親しみ、音や音楽に対する関心を持ち、主体的に創作や鑑賞の学習に取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽表現を工夫し、どのように創作するかについて思いや意図をもっている。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、解釈したり価値を考えたりして、よさや美しさを味わって聴いている。
学習活動に 即した評価規準	同一楽曲における複数の異なる編曲版に親しみ、静止画と音楽の関わりに対して関心を持ち、意欲的に物語に合うBGMの創作に取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素を知覚し、静止画のイメージや特徴を感じながら、物語に合うように一つの旋律をもとにしてアレンジを工夫し、どのようにBGMを創作するかについて思いや意図をもっている。	BGMを形づくっている音楽の要素を知覚し、それらの働きが生み出す静止画の特質や雰囲気を感じながら、物語とBGMの関わりについて考えたり想像したりして、よさや特徴を味わって聴いている。

〔題材の指導と評価（全4時間）〕

次時	ねらい	主な学習活動	評価	評価の方法
1	1 同一楽曲における異なる編曲版を味わう	<ul style="list-style-type: none"> ・同一楽曲の異なる編曲版の体験 ・場面設定 ・曲調決め ・物語の設定 	ア	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・ワークシート ・グループ活動
	2 物語に合ったBGMをつくる	<ul style="list-style-type: none"> ・物語の設定 ・楽器決め ・オリジナルBGMづくり 	アイ	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・創作 ・ワークシート
	3 物語に合ったBGMをつくる	<ul style="list-style-type: none"> ・オリジナルBGMづくり ・BGMの練習 	アイ	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・創作、練習 ・ワークシート
	4 オリジナルBGMの発表をする	<ul style="list-style-type: none"> ・BGMの練習 ・物語とBGMの発表 	エ	<ul style="list-style-type: none"> ・発表 ・ワークシート

(3) 授業内容

〔1時間目〕

まず導入部分として、同一楽曲における様々な編曲版を味わうために、既習曲である《心の中にきらめいて》を、楽譜通りのものと、音楽の諸要素（音域とテンポ）を変え、曲調をアレンジしたもの2種類（低音域でゆっくり・どっしりとした感じ、高音域で軽やかに可愛らしい感じ）の計3種類の伴奏で歌唱して、その違いを聴き取らせた。その後、象とひよこの写真を提示し、どの曲調の《心の中にきらめいて》がそれぞれの写真にふさわしいか考えさせた。その際、例えば机をドンと叩いたり、口笛を吹いたりなどのような合の手を、こちらから提供して即興的に実演させ、同じ曲でも編曲が違うことで印象も変わってくるということに気付かせるようにした。

その後、「トムとジェリー」の動画を、音を消した状態で見せ、ワークシートを用いて、グループごとに与えた「トムとジェリー」の静止画3枚から感じられる印象を話し合い、それぞれどんな場面設定にしたらよいか考えさせた。

もととなる旋律を装飾・編曲した4種類の旋律A～Dから、自分たちのグループの物語にふさわしい旋律を一つ選ぶ曲調決めの活動では、4種類の旋律を「比較聴取」し、ワークシートNo.1（写真1）を用いて、それぞれの旋律の違いや特徴を聴き取る活動を行った。ここでは、「曲想は明るいのか暗いのか」「テンポは速いのか普通なのか遅いのか」などと選択肢を設け、それぞれの特徴を考えやすいよう導いていった。

♪曲調のちがう4つのメロディーを聴いて、それぞれの特徴を考えてみよう

(メロディーA) ・明るい or 遅い ・速い or 普通 or 遅い ・かたい or 普通 or やわらかい ・はっきり or 普通 or おだやか ・楽しい or 普通 or 落ちついた ・その他()	(メロディーB) ・明るい or 遅い ・速い or 普通 or 遅い ・かたい or 普通 or やわらかい ・はっきり or 普通 or おだやか ・楽しい or 普通 or 落ちついた ・その他()
(メロディーC) ・明るい or 遅い ・速い or 普通 or 遅い ・かたい or 普通 or やわらかい ・はっきり or 普通 or おだやか ・楽しい or 普通 or 落ちついた ・その他()	(メロディーD) ・明るい or 遅い ・速い or 普通 or 遅い ・かたい or 普通 or やわらかい ・はっきり or 普通 or おだやか ・楽しい or 普通 or 落ちついた ・その他()

()グループの静止画に合いそうなメロディーは……メロディー()

写真1 ワークシートNo.1（一部）

〔2時間目〕

2時間目は、グループごとに静止画3枚の印象から読み取れる物語の台詞やナレーションを考えていく活動から始めた。その後、1時間目で選んだ旋律を何の楽器で演奏するのか決めさせた。さらに、物語にふさわしいBGMへとアレンジさせるために、旋律だけでなく、合いの手やハモリ、和音、ベースなどのようなサウンドエフェクトを、打楽器を用いて取り入れることによって、オリジナルBGMづくりを行った。この付け加えるサウンドエフェクトのパターンもこちらで事前に何種類か用意し、ワークシートNo.2のお助けシート（写真2）で生徒に示して、スムーズな学習の流れを促した。

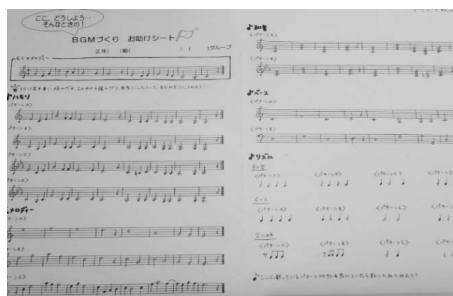


写真2 ワークシートNo.2

〔3時間目〕

2時間目に引き続き、打楽器でサウンドエフェクトを取り入れさせながら、オリジナルBGMづくりを行わせた。その際、グループに1枚楽譜を用意し、自分たちで再現可能なように記譜する活動も取り入れた。写真3は、あるグループが創作したBGMの楽譜である。

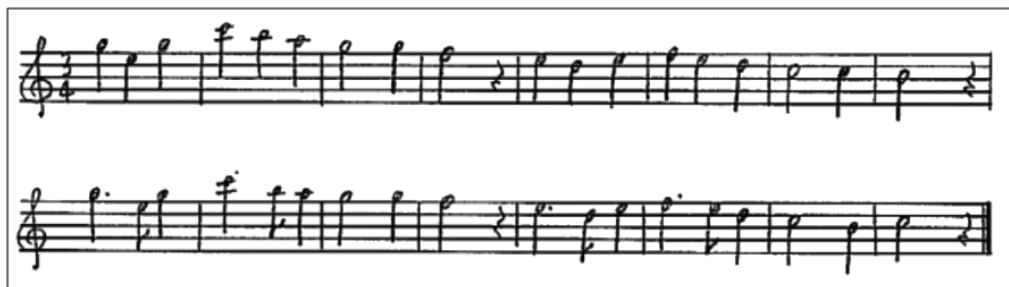


写真3 生徒がつくった楽譜（筆者が写譜）

このグループは、4種類の中から、唯一の3拍子であるメロディーCを選んだ。3枚の静止画からは、「トムが子守歌をうたう」という物語を考え、それにふさわしいBGMをつくっていた。楽譜を見てみると、メロディーの後半のリズムが4分音符から符点が変わっている。2回同じようなメロディーが繰り返されるため、何か変化をつけたかったのではないかと考えられる。つまり、ここでは音楽を形づくる構成として「対照」に着目した「創作」学習が行われている。

また、使っている楽器に着目してみると、ビブラフォンやフィンガーシンバル、トライアングルなど、余韻があり、やさしくきれいな音色をもつものばかりを選択していた。このことから、子守歌を歌って眠くなっていく雰囲気、特徴的な音色によって表現したかったのではないかと予想できる。このように、このグループは、「構成」と「音色」の2つの諸要素を工夫し、「編曲（創作活動）」を行っていったのだと考えられる。

〔4時間目〕

4時間目は、グループごとにつくったBGMを発表する場を設け、活動の過程や成果を披露した。3枚の静止画を大きなスクリーンに映し出し、台詞やナレーションとBGMを同時進行で発表させるようにした。他のグループの発表を鑑賞する際は、そのBGMが静止画とどう関わっていてどんな物語がイメージできるのか、その関連性について着目しながら、感想を記入させた。クラスによっては、選んだ旋律が全てのグループで同じだったり、逆に違ったりしていて、もとの旋律は同じでも、拍子やリズム、用いる楽器によって生まれる雰囲気の違いに気付かせる体験ができたことが、生徒のワークシート（写真4）からも分かった。

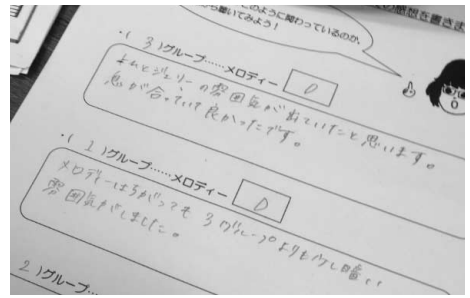


写真4 生徒の感想(ワークシートNo.3)

(4) 事後アンケート

最後に、事後アンケートを実施して、今回の授業の振り返りを行った。集計結果は、以下のとおりである。

図7 事後アンケート

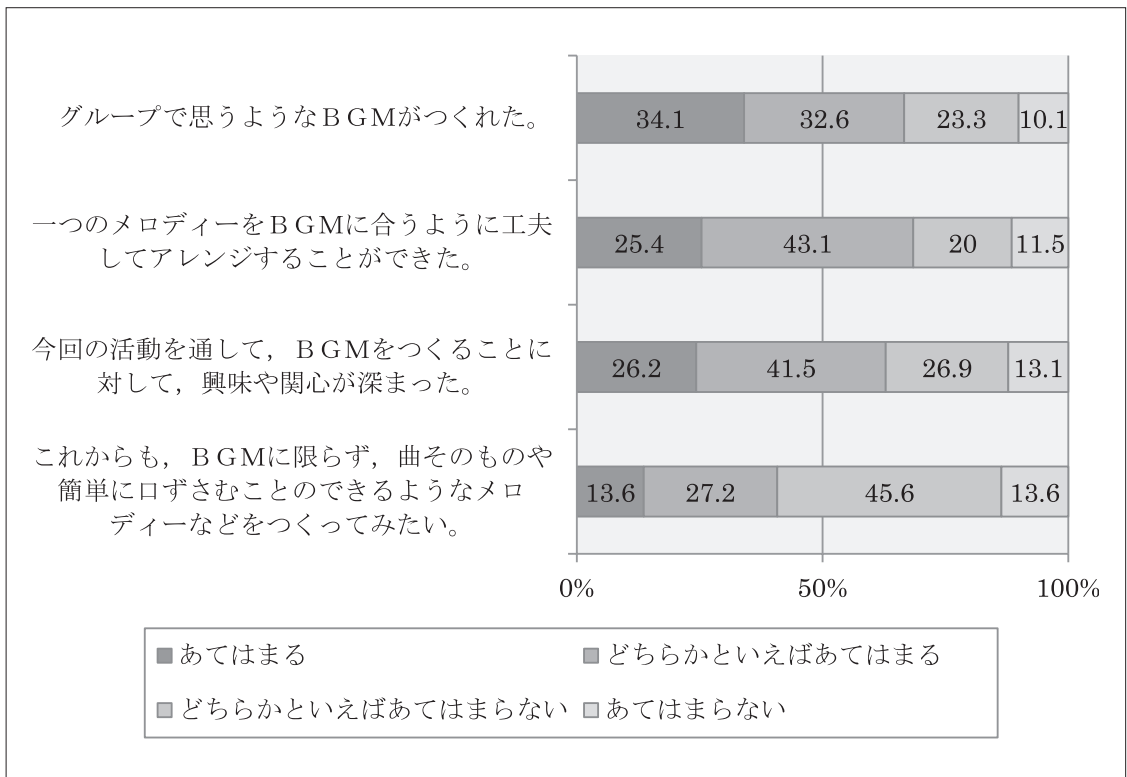


図8 時間数は4時間で
ちょうど良かったですか。

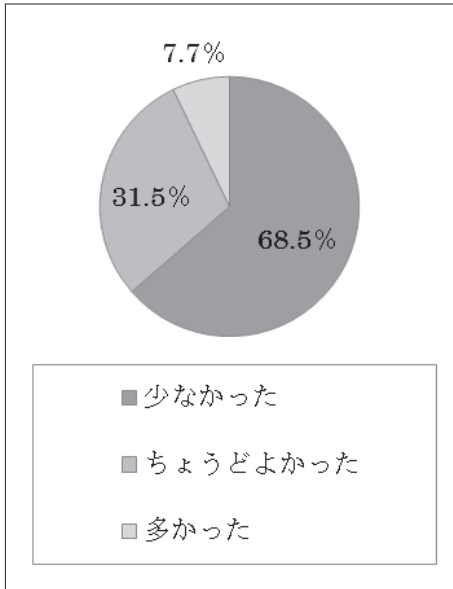


図9 BGMをつくるとき、静止画を使った
ことは、あなたにとって良かったですか。

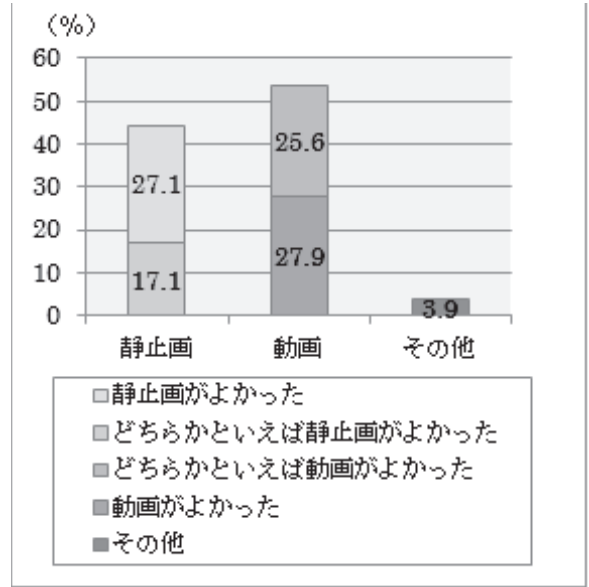


図10 興味や関心が深まった理由 (複数回答可)

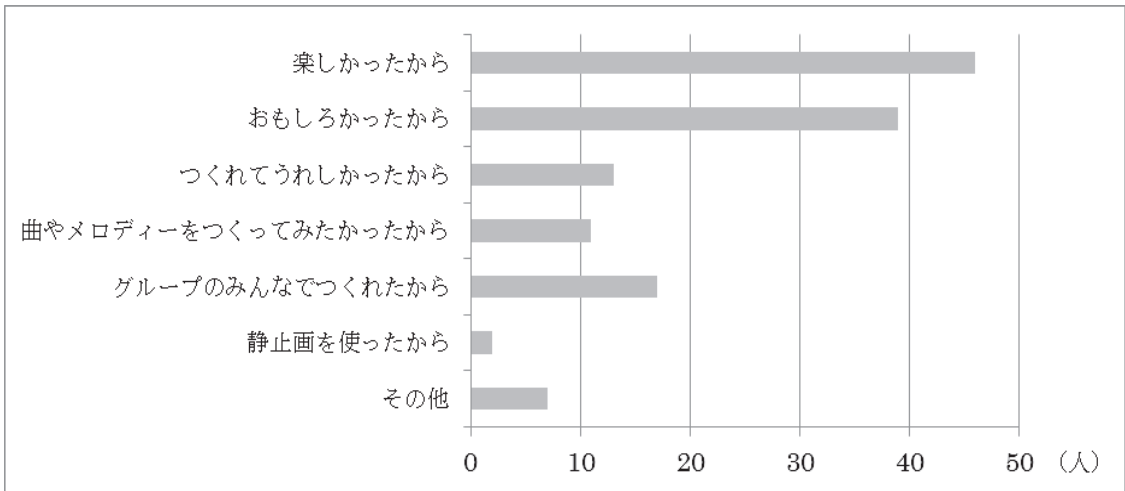
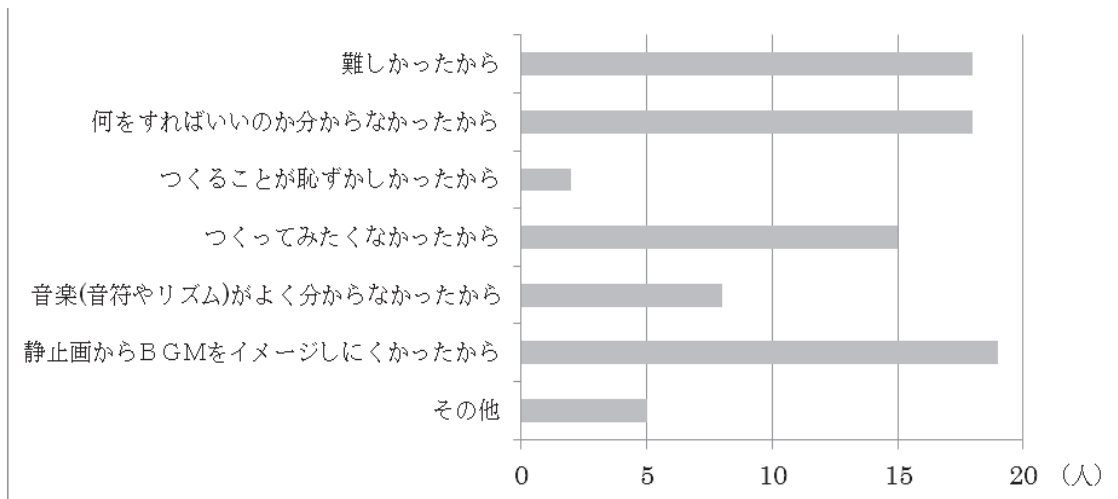


図11 興味や関心が深まらなかった理由（複数回答可）



この結果から、約7割近くの生徒が、BGMづくりへの達成感を感じていることが分かる。今回の活動を通して、「創作」活動への興味や関心が深まったと感じている生徒も、授業前と比べると約2割増えている。理由としては、「楽しかったから」「おもしろかったから」などが多く挙がっていたことから、「創作」活動を経験してみて、実際に楽しさやおもしろさなどの「創作」の魅力を感じることができたのではないかと考えられる。

一方、「どちらかといえば深まらなかった」「深まらなかった」と答えた理由としては、「難しかったから」「何をすればいいのかわからなかったから」「つくってみたいなかったから」「静止画からBGMをイメージしにくかったから」などが多く挙がっていた。初めての「創作」活動で、やはり難しさや戸惑いを感じる生徒も多かったようだ。また、これからも創作をしてみたいという意欲が湧いた生徒は、約4割しかいなかった。時間数が少なかった、静止画の使用からBGMをイメージしにくかった、という意見が多かったことから、授業内容とその方法を改めて見直す必要がある。

4. 考察

本授業実践の導入部分では、生徒に馴染みのある《心の中にきらめいて》の「音域」と「テンポ」を変えて歌唱し、聴き比べることによって、同じ曲でも何が違うのかを知覚し、それによってどのように雰囲気が変わってくるのか感受させることができた。この「比較聴取」で学んだことが、「創作」活動でのイメージに生かされ、「創作」と「鑑賞」（ここでは「歌唱」を通じた「鑑賞」）との一体化もある程度図ることができたことから、導入として一定の効果が得られたと考えられる。

また、メインの学習であるBGMづくりでは、「編曲」の活動を中心としたことで、これまで消極的な意識を抱いていた「創作」活動の中に生徒を踏み込ませていくことができた。何もない状態から創作するよりも、すでにあるものを変えていく「創作」活動の方が生徒の実態にも合っており、対象となる本校2年生の現状に即した学習内容であったと言える。

授業前に比べて、「創作」への興味や関心が深まった生徒が増えていることから、このような「創作」と「鑑賞」の一体化をめざす授業実践の効果も伺えた。

IV おわりに

本研究では、生徒や教師の「創作」への意欲を喚起させるという意図で授業実践を行った。その結果、「創作」に対する生徒の興味や関心を一定程度高めることはできた。しかし、事後アンケートを見てみると、今後も「創作」活動をしてみたいという継続学習への意欲が湧いた生徒は、4割程度しかいなかった。

具体的な課題としては、次の2点が考えられる。

まず、一つは、授業構成やその方法が生徒にとって的確ではなく、よりよい指導言を与えたり、支援をしたりすることができなかったことである。今回の授業では、「創作」活動のための準備段階やイメージを喚起させる活動に多くの時間を割いてしまったため、「創作」そのものの試行錯誤やブラッシュアップの学習時間を十分確保することができなかった。生徒の実態を十分に考慮し、それに見合った授業展開を構成する力、また目の前の生徒としっかりと向き合い、よりよい指導言や支援を行えるような授業実践力を高めていかなければならないと強く感じた。

もう一つは、「表現（創作）」と「鑑賞」の一体的学習を総合判断する評価規準が提示できなかったことである。導入における「比較聴取」の活動で学んだことが、BGMづくりでどう活かされたのか、生徒自身にふり返させる場を設けておけば、「鑑賞」活動を取り入れた「創作」活動を実践した意義がさらに見出せたのではないかと考えられる。

これらの課題を踏まえ、今後さらに生徒や教師の「創作」への意欲を喚起できるような授業を開発し、より有用な「表現（創作）」と「鑑賞」の一体的学習の可能性について提案を行いたい。

引用・参考文献

- 1) 衛藤晶子・小島律子 (2006) 「音楽授業において知覚・感受を育てる方法論としての比較聴取—表現の授業の場合—」『大阪教育大学紀要』第V部門、第54巻、第2号、pp.29-44.
- 2) 「音楽等質問紙調査」(2008) 国立教育政策研究所、インターネット、
<http://www.neir.go.jp/kaihatsu/ongakutou/index.htm> (2014/2/24にアクセス)
- 3) 川村敏広 (2012) 「創作の活動における思考力・判断力・表現力の育成を目指した指導法の研究—創作の活動を通して、主体的に音楽活動に取り組む生徒の育成を目指して—」『青森県総合学校教育センター 教科等教育長期研究講座報告』G5-04.
- 4) 百武美紀 (2009) 「中学校音楽科における『創作』指導に関する一考察—音楽能力を高める旋律創作の指導法をめぐって—」佐賀大学 文化教育学部 音楽選修・教科教育選修音楽分野 教育学研究科 音楽教育専修、インターネット、
<http://sagadaiongaku.pd.saga-u.ac.jp/H20docs.html> (2014/2/24にアクセス)
- 5) 日吉武・山崎浩隆 (2012) 「比較聴取による音楽鑑賞の授業構成—分析的な聴取から鑑賞への発展過程に注目して—」『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』、第6巻、第1号、pp.1-9.
- 6) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社.